

2016. 12. 8 (木)

光＝心で見る：社の2号教室（旧チャペル）

野瀬 正治

はじめに

今日は光というテーマをいただきましたので、光を題材に少しお話ししたいと思えます。まず、光について、私がどのように考えているかをお話しした後、写真のパネルを見ながら私の経験をお話ししたいと思います。

さて、光はなじみの深い言葉で、私たちは小さいときから光を身近に感じていたのではないかと思います。私自身は小さい頃に天地創造の話聞いたことを思い出します。

そのお話で1日目に光と闇が生まれたと聞いて、幼少の頃なので強く印象に残ったことを覚えています。それに限らず光は興味のある言葉ですが、一体、世界や世の中がどのようにつくられたのか、あるいは、どのように誕生したのかと、誰しもが不思議に思ったことがあるのではないのでしょうか。

『ニュートン』という雑誌がありますけれども、定期的に光や音の特集を組んでいます。私も興味があるので特集のたびに購読しています。今、ふと、頭をよぎりましたが、七夕には夏の夜空を見上げて、ひこ星や織り姫星がキラキラと光っているのを見たりし、光は昔から身近であったことを思い出します。

話しかける光

(1) 光とあり様：異なる印象（メッセージ）

私は、「光は、独自の時間と空間を私たちに届けて話しかけていると感じています。」別の言い方をすると、普通の生活で、私たちは光を通して時間と空間を心で見ることによっていろいろなことを思ったり感じたりしているのだと思います。

見るとは言っても、何か具体的に寸法を測るのとは違って、実際には光に照らされるものを感じているのだと思います。だから、同じ物体を見ても、光がその物体をどのように伝えるか、によって受けては異なった印象を持ちます。別の言い方をすれば、見るとは、光によって照らし出されたものから、人は、いろいろなことを違って感じる、或いはいろいろなことを連想する、ということです。

さらに別の視点で捉えると、それはあり様（ありよう）の異なり、として私たちの生活では感じていると思います。たとえば、物質的には同じものであっても、その並べ方、配置の仕方によって、全体の印象が違ったものになります。これは、人間が物質だけに反応していないことを端的に示しています。そのことはすべてに関して同様にいえ、「あり様の違い」として感じています。

ものの並べ方を例に、今、あり様の違いを話しましたが、並べ方ではない別の例として、光についてのあり様について述べると、日光と月光は、同じく光ではあるのですが、昼の光か、夜の光かで、違った印象を与えます。また、同じ日光でも木漏れ日というともまた違った印象があります。やはり、それもあり様の違いです。

同様に、同じ月光であっても、先日の68年ぶりのスーパームーンでは違った印象を与えました。68年ぶりとか、スーパームーンとかいうと、違った印象を与えます。光は、そのあり様によって、人に与える印象を異ならせることができるので、人にメッセージを伝えることもできるのです。

(2) メッセージとしての光

受身的に捉えれば印象という捉え方になるのですが、能動的に捉えればそれはメッセージの発信になります。あり様の違いは、印象として留まることもあるし、メッセージとして相手に届けられることもあります。違いが表現できるからメッセージにもなるのです。

さらに、光を別の視点、すなわち英語で捉えると違ったことがわかります。英単語としては、まず Light を思い浮かべますが、類似語に、イルミネーションという語があります。辞書では、照明、照らすこと、照らされる状態、とあり、光を能動的に捉えています。日本語訳で電飾という訳もありますが、この言葉は、装飾するという点を強く言っています。重要な点は、能動的に捉えた光のメッセージ性で、単にモノを照らすのではなく人にメッセージを伝えている点です。メッセージを伝えるとは、まさに人の心に入りこんで、人の精神構造に浸透する、あるいは考え

方に影響を与える、という点です。

(3) 時空を超える光

さて、冒頭に、光は何なのかについて私は、「光は、「独自の時間」と「空間」を私たちに届けて話しかけている」と申し上げました。もう少し説明をすると、「独自の時間」と「空間」というのは、光の働きかけが、過去のある出来事を思い出させたりあるいは未来への何かの期待を呼び起こしたり、あるいは現在の気づかなかったある事柄に目を向けさせたりする点で、独自の時間とは、時間を越えて特定のことに人に関与させるのだと思います。また、独自の空間とは、光がそこにはない別の空間を連想させたり、今有る、気づかなかった空間を気づかせたりするのだと思います。例えば、イルミネーションという言葉の意味に、啓蒙（けいもう）；解明、という意味がありますが、時空を超えて人に何かを気づかせたりするからだと思います。

私の体験

私が、これまで述べてきた話で、特に光という存在を強く感じたのは、まだ大学院に行く前の20代の後半の社会人4年目で、所属していた会社のプロジェクトを推進した時でした。何のプロジェクトかという点、コーポレートアイデンティ（会社や組織の理念やロゴ）を変更して新たなシンボルと理念を社員に浸透させるとともに社会向かってプレスリリースをする、というプロジェクトでした。これがそのプロジェクトのクライマックス時のパネル写真です（資料1）。

なぜ、そこで光なのかというと、このパネ

ルになっているクライマックスの場面は、光がすべてを司っているからです。司るとするのは、光がメッセージを参加者と関係者に伝えているということです。光によって、イメージを形成し、それをメッセージとして関係者の心に浸透させているからです。

このパネルは左半分がその当日の写真で、右半分がその前日の写真です。右上の写真でヘッドホーンをしているのが私で、なんとなく私であることが分かるのではないかと思います。

私の体験から光とメッセージの関係の特徴を3つほど話させて頂くと、1つは、このパネル写真にある4枚の写真の左下の写真についてで、フラグを掲げて4人が行進し、その後ろにはこの企業の新たな理念とそれを表象している新たなロゴを頭上に掲げている人がいる写真です。ロゴは単なるマークではなく、また、フラグは新たな理念を表象しています。実はここの5人はその企業の地域や職種などのカテゴリーを代表する男女を人選して行進してもらっています。一目で自分の代表が誰であるかが分かり自ら参加しているイメージが届けられます。

真っ暗闇の空間で光はここだけに当てられています。見る人は、ロゴやフラグそして制服などから新たなイメージを凝縮して強くここに焼き付けて革新していきます。そして、この瞬間のイメージは、1万人程の国内の社員そして数十万の国内外の関係者に伝達され体験が共有されます。国内外の関係者の心に光のメッセージが届けられます。

左下の行進している彼ら彼女らの位置ですが、この左上の写真を見てください。全体像が分かるこの写真でいうと壇上から中央の階段を下りて真っ直ぐにこの通路を行進してい

ます。天井は反射照明ですが、行進している左下のこの写真ではご覧のとおり反射照明は消えていますから真っ暗で、スポットライトが当たっているのは行進している5人だけです。すなわち、各職場の代表を通して、この表象とフラグについての無意識の一体感が作られています。光が強いメッセージとして能動的に関係者の意識に働いている事例です。

それから2つ目は、壇上の左右のスクリーンへの投映です。実は、これは、いままでのところのプロジェクトマッピングのはしりで、建物に映写しない点が異なりますが、コンピューター制御で映像が、ここの左右のスクリーンに映し出されます。もちろん内容は、意識改革につながるメッセージ性の強い内容です。短時間に凝縮して映し出すので迫力があり、与える印象は強く人の心に入っていく内容です。右上の写真を見て頂くと、ここに数台映写機が設置されていますが、これらがコンピューターで制御されて投影するわけです。今から、2〜30年前ですから、当時としては最先端だったと思います。ちなみに私の後ろに3人立っている真ん中の人は、CIでは日本の草分けのパオスという会社の創始者で中西元男という方です。NTTのロゴのダイナミックループなどもこの会社が手がけました。

プロジェクトマッピングは最近あちこちで見られるようになりましたが、メッセージ性をどこまで持たせているかは、別の話で、先日、USJでプロジェクトマッピングを見ましたが、いろいろが綺麗であることはその通りでしたが、メッセージ性はあまりありませんでした。USJではメッセージ性があまりあってはいけないのかも分かりませんが、

そうしたケースでは、今の私の話しと違って装飾的効果の方が求められるのかも分かりません。

3つ目は、音との関連性です。中西元男さんの左にいる人は音響の専門家です。この写真が撮られた後、映写リハーサルをしたのですが、その映写の後、この方が私に、「絵は音で見る」と話されたのです。大変強く心に残りましたから今でも時々思い出します。普通のいいまわしなら、「絵は光によって目で見ると、音は耳で聞く。」というのが普通の表現なのですが、彼は、「絵は音で見る」と私に解説をしてくれました。確かに、音によってメッセージは強く心に刻まれます。エモーショナルな影響は音の方が直接的なのかも知りません。冒頭に、心で見る、と言いましたが、広い意味での心象が形成される時、音は光と相乗効果により心に影響を与えるのだと思います。

音と光の関係を考えると、明るいという漢字は、日と月で構成されていますから、文字通り明るいというのが分かります。一方、光が少なくなると暗くなりそして闇になります。漢字の「暗」は、日に音と書いて、「暗」と書き、そこには音が登場します。そして、いよいよ光が無くなり闇になると、門の中に音と書いて、闇ですから、音だけで心象が形成されてしまうわけです。真っ暗になるまでは、明りと音で心象を得、闇になると音だけで心象を得ているというのが伝わってきます。音と光は一体になって人に印象やメッセージを与えると、古来より認識されていたのだと思います。

さて、最後に、もう一つ見て頂きたいものがあります。それは、このステンドグラス（資料2）です。申し上げたいことはこれま

で述べてきたことと同じで、心で見る光についてです。実は、この裏から光があたると、服はグリーンに頭巾や靴はレッドに帽子はブルーにそして顔は肌色に明るく輝きます。まさに命があるかのようになります。また、ここにはクマのプーさんを含めて4つの被写体があるのですが、その関係が光を通すことで文字通りいきいきとしてきます。そして、これらの被写体にはそこでの物語があり、そのストーリーを聞いたり、知ったりすると、さらに暖かな気持ちになります。

ステンドグラスはヨーロッパで発達しましたが、メッセージを伝える重要な役割を持っていたと聞きます。なるほど、人の心に訴求する力があるように思います。このチャペルもステンドグラスやそれからやはり窓からさす独特の光は、メッセージを持っていると感じます。すなわち、光は、冒頭に述べたように、人に過去の出来事を思い出させたり、あるいは別の空間を連想させたりします。私は、このチャペルの窓からさす独特の光に、昔の「社の2号教室」の窓の横にあった壁の白熱灯の間接照明のあかりを思い出します。そして私はそのあかりが不思議と重厚な光であるように感じていたのを思い出します。私の後ろにある象徴としてのバナーが「社の2号教室」では黒板を横に開くと、チャペルの壇上が現れそこに掲げられていたことも思い出します。

ここのチャペルにさし込んでいる光に、不思議とかつての「社の2号教室」での時間と空間を感じながら今日は話をさせて頂いた次第です。社の2号教室（旧チャペル）にも感謝したいと思います。

本日は、ご清聴ありがとうございました。
（社会学部教授）

資料 1



資料 2



(次のアドレスからアクセスできます.)

<https://www.dropbox.com/s/9toy1bsyj18xf7m/photo.pdf?dl=0>

なお、1は数字 (yの次)、lは英字 (jおよびdの次).